

アユの種苗生産試験 - IV

鈴木規夫・高橋昭夫・作中宏

西原隆通・清水泰亘・小山定久

石崎博美・佐藤茂・小山忠幸

前報-IIIにつづき汽水、循環濾過方式を用いてアユの高密度人工種苗生産試験を実施し、特に初期放養密度と飼育終了時の生産密度についての資料を得るために本試験を行なった。

採卵用親魚の確保に協力された相模川漁業協同組合連合会（篠崎隆会長）、相模川第二漁業協同組合（水島英耀組合長、菊地光男副組合長）岐阜県長良川下流漁業協同組合大中増一副組合長、海水の採取に協力された神奈川県水産試験場相模湾支所（伊藤博文所長）外の各位に深謝します。

また本試験は標記筆者以外にも場員全員の協力により行なわれたものである。

材 料 と 方 法

試験池及び施設

前報と同一の施設を用い、試験池9面、水面積計82.8m²、池水量計70.2m³である（表-1）。これらの試験池に対してB池2基、A池1基の濾過槽

表-1 試験池の規模

を用いて汽水による循環濾過飼育を行なった。両試験池の池水量に対する濾材の比はB池23.4%、A池5.9%で水路等全水量に対する濾材の比はそれぞれ16.3%、5.2%である。

池 No	池数	大きさ (m)			池 1 面 当り		計	
		長	幅	水深	面積 (m ²)	水量 (m ³)	面積 (m ²)	水量 (m ³)
B-1,2,3,4	4	5.0	1.5	1.0	7.2	7.2	28.8	28.8
B-5,6	2	6.0	1.5	0.7	9.0	6.3	18.0	12.6
A-5,6,7	3	6.0	2.0	0.8	12.0	9.6	36.0	28.8
計	9						82.8	70.2

用水と水温

用水には前報同様淡水池内でふ化し、ふ化直後に海水を添加し、比重(20℃)1.007~1.005とし、仔魚の成長とともに海水の添加量を減じ、ふ化後130~170日で淡水にきりかえた。

水温の保持には全池ともボイラーによる間接加温とし、池水温を17~20℃に保持した。

飼 料

表-2 飼料の種類、給餌期間及び量

種類	給餌期間 (ふ化後日数)	給餌回数	給餌量	備考
シオミズツボワムシ、タマミジンコ、ブラインシュリンプ、鶏卵黄及び配合飼料を用いた（表-2）。	1~100日	2回/日	平均 350×10^6 個体/日	培養
シオミズツボワムシ	30~150	2	" 7×10^6 "	"
タマミジンコ	30~170	1~2	1.8 Kg/全期	ふ化直後卵重量
ブラインシュリンプ	5~100	1~2	3.30 個/全期	
鶏卵黄	10~	1~4	7.30 Kg/全期	市販品
配合飼料				

アユの種苗生産試験 - IV

鈴木規夫・高橋昭夫・作中宏

西原隆通・清水泰亘・小山定久

石崎博美・佐藤茂・小山忠幸

前報-IIIにつづき汽水、循環濾過方式を用いてアユの高密度人工種苗生産試験を実施し、特に初期放養密度と飼育終了時の生産密度についての資料を得るために本試験を行なった。

採卵用親魚の確保に協力された相模川漁業協同組合連合会（篠崎隆会長）、相模川第二漁業協同組合（水島英繩組合長、菊地光男副組合長）岐阜県長良川下流漁業協同組合大中増一副組合長、海水の採取に協力された神奈川県水産試験場相模湾支所（伊藤博文所長）外の各位に深謝します。

また本試験は標記筆者以外にも場員全員の協力により行なわれたものである。

材 料 と 方 法

試験池及び施設

前報と同一の施設を用い、試験池9面、水面積計8.28m²、池水量計70.2m³である（表-1）。これらの試験池に対してB池2基、A池1基の濾過槽を用いて汽水による循環濾過飼育を行なった。両試験池の池水量に対する濾材の比はB池23.4%、A池5.9%で水路等全水量に対する濾材の比はそれぞれ16.3%、5.2%である。

表-1 試験池の規模

池 No	池数	大きさ(m)			池1面当り		計	
		長	幅	水深	面積(m ²)	水量(m ³)	面積(m ²)	水量(m ³)
B-1,2,3,4	4	5.0	1.5	1.0	7.2	7.2	28.8	28.8
B-5,6	2	6.0	1.5	0.7	9.0	6.3	18.0	12.6
A-5,6,7	3	6.0	2.0	0.8	12.0	9.6	36.0	28.8
計	9						82.8	70.2

用水と水温

用水には前報同様淡水池内でふ化し、ふ化直後に海水を添加し、比重(20℃)1.007~1.005とし、仔魚の成長とともに海水の添加量を減じ、ふ化後130~170日で淡水にきりかえた。

水温の保持には全池ともボイラーによる間接加温とし、池水温を17~20℃に保持した。

飼 料

表-2 飼料の種類、給餌期間及び量

種類	給餌期間 (ふ化後日数)	給餌回数	給餌量	備考
シオミズツボワムシ、タマミジンコ、ブラインシュリンプ、鶏卵黄及び配合飼料を用いた（表-2）。	1~100日	2回/日	平均 350×10^6 個体/日	培養
シオミズツボワムシ	30~150	2	" 7×10^6 "	"
タマミジンコ	30~170	1~2	1.8 Kg/全期	ふ化直後卵重量
ブラインシュリンプ	5~100	1~2	3.30 個/全期	
鶏卵黄	10~	1~4	7.30 Kg/全期	市販品
配合飼料				

結 果

採卵とふ化

採卵は相模川(県内)、長良川(岐阜)、狩野川(静岡)及び利根川(群馬)の天然親魚から計4,527千粒(推定)を行ない計1,507千尾(推定)のふ化仔魚が得られた(表-3)、各飼育池に表-4のように収容した。

表-3 採卵及びふ化状況

河川名	県名	採卵回数	採卵数 (推定、千粒)	ふ化率 (%)	仔魚数(千尾)	備考
相模川	神奈川	5	2048	42.1~15.5	546	
長良川	岐阜	3	1904	44.1~21.9	773	
狩野川	静岡	1	505	31.3	158	
利根川	群馬	1	(70)	-	30	発眼卵で購入
計		10	4527	332*	1507	*利根川を除く

餌料培養

初期、中期餌料としてシオミズツボワムシ(*Brachionus plicatilis*)及びタマミシンコ(*Moina macrocopa*)の培養を行なった。培養池は温室内コンクリート池(2.0.5m³)1面及びビニールハウス内コンクリート池(20.0m³)2面を用い、水質、水温については前報とほぼ同一の方法を用いたが、本年度は前年度に比し、ビニールハウス内の培養池を新設したため培養水の一部交換(25~30%)を5~10日間隔で行ない隨時増殖量の多い培養池から採集した。シオミズツボワムシの培養は前年同様長期間安定した高密度(100~150個体/ml)の培養結果が得られたが、タマミシンコの培養は最高5個体/ml以下であり、シオミズツボワムシに比べ安定した培養結果は得られなかった。特にタマミシンコ培養時の通気量が増殖量に強く影響しているように考えられ、今後適正通気量についての解明が必要である。

表-4 ふ化仔魚の全長と収容密度

池 No	ふ化月日	仔魚数 (千尾)	全長 (mm)	密度 (尾/l)
B-1	11. 6	120	6.31	16
	2 10. 28	187	6.30	25
	3 10. 20	225	6.24	30
	4 "	300	6.24	40
	5 11. 11	126	6.24	20
	6 11. 20	158	6.52	25
	A-5 10. 1	30	6.20	3
A-5	6 11. 26	211	6.08	22
	7 12. 4	108	6.08	15
計		1,465		

水温・水質

飼育期間中の水温の変化は表-5に示すとおり、B試験池で18.9~20.9℃、A試験池で18.4~21.4℃を示している。A、B各試験池群での池間の差はほとんどなかった。

水質の変動についてはA、B各試験池間では大きな差は認められないため、それぞれから1面ずつの分析結果を表-6に示した。

表-6に見られるように各項目とも前年同様B試験池よりA試験池のDOが低く、COD、NH₄-N、NO₂-Nが高い値を示している。

CODの分析値の上限がA-5池8.8、B-1池6.0mg/lを示しているが、このような高い値を示した場合には20~30%の飼育水を交換した。

表-5 試験池の水温(℃)

月 旬	時	B - 1		A - 6	
		10:00	16:00	10:00	16:00
11	上	18.9	19.9	—	—
	中	20.0	20.3	—	—
	下	20.6	20.0	18.1	18.0
12	上	20.4	20.5	18.9	19.6
	中	20.4	20.4	19.4	19.9
	下	20.1	20.2	19.7	20.4
1	上	19.1	20.1	20.6	20.8
	中	19.8	20.9	20.1	20.0
	下	19.6	20.8	20.4	20.7
2	上	19.3	20.0	20.5	21.4
	中	19.3	19.8	20.4	20.8
	下	19.5	19.7	19.2	20.1
3	上	19.3	19.4	18.6	19.4
	中	19.8	19.6	19.0	18.9
	下	18.9	19.4	18.7	19.2
4	上	19.2	19.6	19.0	19.6
	中	19.3	19.8	18.8	19.0
	下	18.3	19.6	19.6	19.6
5	上	15.8	15.9	16.0	16.4
	中	—	—	—	—

表-6 試験池内の水質

項目	単位	A - 5	B - 1
比重	(20°C)	1.006~1.003	1.007~1.003
pH		7.5~8.0	7.4~8.3
D O	mg/l	6.79~7.76	6.66~8.01
"	%	72.8~81.7	84.3~88.3
COD	mg/l	0.1~8.8	0.6~6.0
NH ₄ -N	"	0.04~1.38	0.01~0.42
NO ₂ -N	"	0.006~0.570	0.002~0.135

種苗の生産結果

放流体型に達した取上げ時の生産結果は表-7のように157~197日間の飼育で池別の平均体重1.9~3.8gの稚魚約139,000尾が生残した。特に生残率が高く密度の多いB-4、5、6号池は飼育期間120日前後で空になったB-3、A-5号池に飼育魚の一部を分養した。

表-7 種苗生産量、生残率、体重及び生産密度

池No	飼育日数	開始時尾数 (千尾)	生残率 (%)	平均体重 (g)	生産量		生産密度		備考
					千尾	Kg	尾/m ³	Kg/m ³	
B-1	182	120.0	18.4	1.9	22.1	42.0	3,069	5.8	
2	185	187.0	12.3	2.0	22.9	45.8	3,181	6.4	
3	140	225.0	0	—	0	0	—	—	ゲルギア症のため 約30,000尾処分
4	197	300.0	14.5	2.1	43.4	91.2	6,028	12.7	B-3に分養した魚を含む
5	180	126.0	16.7	2.3	21.1	54.2	3,349	8.6	A-5 "
6	175	158.0	8.7	2.9	13.7	41.2	2,175	6.5	A-5 "
小計		1,116.0	11.0		123.2	274.4	2,976	6.6	
A-5	157	30.0	29.0	1.9	8.7	16.5	906	1.7	
6	169	211.0	1.6	3.2	3.4	10.9	354	1.1	
7	165	108.0	3.2	3.1	3.5	10.9	365	1.1	
小計		349.0	4.5		15.6	38.3	542	1.3	
計		1,465.0	9.7	2.2	138.8	312.7	1,977	4.5	

各池の生残率は A-5 ~ 0 (B-3) % であり、飼育開始時の仔魚数に対して全生残率は 9.7 % を示した。

表-7に見られるように本年度の生産結果の特徴は B 試験池に比べ A 試験池の生残率が著しく低いことであった。飼育期間内の減耗の原因については後述するが、A 試験池に発生した異常大量へい死と Glugea 感染症であった。

飼育水量に対する生産密度では A 試験池 2,976 尾/m³、6.6 Kg/m³、B 試験池 542 尾/m³、1.3 Kg/m³ であり、全飼育池に対して 1,977 尾/m³、4.5 Kg/m³ となった。これらの生産密度は前年(46 年度)より低いが、アユの種苗生産についての各所の結果に対して著しく高い結果を示している。

ま　　と　　め

本年度の種苗生産結果は放流体型の稚魚で約 139,000 尾であり、前年(46 年度)に比べ約 10 万尾の生産減であった。このような生産減の原因はふ化後 100 日以降に発生した Glugea 感染症によるへい死及び A 試験池の異常へい死を初めとする飼育中の生残尾数の減少であった。

Glugea 感染症は昭和 45 年頃から各地のアユの種苗生産池で報告されており、現在その治療方法については全く解明されておらず、予防方法として胞子の飼育池内への搬入防止、低温飼育による感染速度の低下、ホルマリン、過酸化水素水、遊離塩素による池の使用前の消毒以外にはないといわれている。

今回発生した Glugea 症についてもサルファ剤、塩酸キニーネによる長期間薬浴、経口投与及び高塩分、低温飼育等種々の対策をこころみたが、効果はほとんど見られず、飼育期間中に計約 60,000 尾の減耗があった。特に B-3 号池では全飼育魚の約 70 % が感染したため全飼育魚を廃棄した。

A 試験池に生じた大量へい死は A

表-8 種苗生産結果と循環濾過施設の比較

-6 池 1 面のみに発生した。発生時期はふ化後 34 日の 12 月 30 日夜から 31 日朝の間であり、30 日夕刻までは全く異常が認められず、よく摂餌していた魚群が、31 日朝にはその 80 % 以上がへい死していた。飼育環境として水温、水質 (NH₄-N, NO₂-N, NO₃-N, D_O) には異常や急変は認められず、魚病の徵候も認められなかった。又同一濾過槽からの処理水を隣接した 2 面 (A-5, A-7) 池に同様に注水しており、これらの池の魚群には異常は認められず、原因は不明であった。原因は不明であったが他の池での発生を防止するために A 試験池の水量の約 1/3 を交換したところ以後同様な大量へい死は発生しなかった。

A 試験池では上記の異常大量へい死以外にも全期間を通じて A-6, 7 号池での減耗が多く、飼育終了時に A-6, 7 号池で合計 6,900 尾が生残したにすぎない。46 年度の生産結果、池の用法を本年(47 年度)と対比すると表-8 のよう

池	B		A		
	年	46	47	46	47
生産尾数	120,823	123,200	114,100	15,600	
生残率 (%)	21.5	11.0	29.6	4.5	
生産密度 (尾/m ³)	2,918	2,976	3,962	433	
池　　数	6		2	3	
(A) 試験池	41.6		19.2	28.8	
水　濾過槽	8.6		1.0	1.0	
量　沈澱池	2.7		0	0	
(m ³)　水路	2.1		3.0	3.0	
(B)　計	59.7		23.2	32.8	
(C) 濾材量 (m ³)	9.7		1.7	1.7	
(A) / (C)	4.3		11.3	16.9	
(B) / (C)	6.2		13.6	19.3	
濾過槽数	2		1	1	

になり、B試験池では生残率に差はあるが、46年度と同一の飼育池を用いて両年とも約12万尾、 $3,000\text{尾}/m^3$ の種苗が生産され、両年の差は認められない。一方A試験池では46年度とほぼ同数の仔魚数で飼育を開始し、生産尾数は46年度に比べ約 $1/7$ 以下であった。このA試験池は46年度には濾材量 $1.7 m^3$ の濾過槽を用いて飼育池2面、水量 $23.2 m^3$ の循環濾過飼育を行ない、1面は淡水を用いた。これに対して47年度は同一の濾過槽を用いて飼育池3面、水量 $32.8 m^3$ の処理を行なった。このため飼育池水量/濾材量の比は46年度1.1.3、47年度は1.6.9となり1.5倍に増加している。

又ふ化仔魚の収容時期もA-5号池とA-6、7号池で約60日の間隔があり、A-6、7号池にふ化仔魚を収容した時にはA-5号池の仔魚はすでに全長 $25 mm$ 程度に成長していたため給餌量の増加とともにA-5池から濾過槽への負荷が増加したものと考えられる。これらのことから、A試験池での生残率に作用したと考えられ、今後の循環濾過飼育方式における用水量、飼育魚量と濾材量の関係についての資料の一端を示しているように思われる。

当初の計画ではB試験池(B-1~4)を用いて初期飼育密度と取上げ量との関係を再検討するために初期密度を16~40尾/ m^3 として飼育を開始したが、前述のようなGlugea感染症が発生したため十分な資料を得ることが出来なかった。

河川放流

生産されたアユ種苗は昭和

表-9 種苗の放流状況

河川名	組合名	放流月日	放流尾数	備考
相模川	相模川(連合会)	5. 9	23,000	
"	" ("")	5. 12	22,000	
酒匂川	酒匂川	5. 11	24,000	
早川	早川河川	5. 17	5,000	
千才川	湯河原観光	5. 23	3,000	
多摩川	川崎河川	5. 19	7,000	
中津川	相模川(連合会)	5. 16(616)	19,000	相模川支流 放流効果試験
計			103,000	

摘要

- 前年に引き続き試験池9面計 $82.8 m^3$ 、 $70.2 m^3$ を用いてアユの高密度種苗生産試験を行なった。
- 飼育方法は稀釀海水(比重 $1.006 \sim 1.003$)を用いた循環済過方式で、水温 $18 \sim 20^\circ C$ で飼育した。
- 飼料はシオミズツボワムシ、タマミヂンコ、ブラインシュプリンプ、鶴卵黄及び配合飼料を仔魚の成長にともなって順次組合せて用いた。
- シオミズツボワムシの培養は前年同様 $100 \sim 150$ 個体/ m^3 の安定した結果が得られたが、タマミヂンコは不安定であった。
- 150~200日の飼育期間で、2ヶ月前後の放流体型に成長した稚魚 138800 尾が生産され、各池の生残率は $29.0 \sim 0\%$ で金ふ化仔魚に対して通算生残率は 4.5% であった。
- 飼育池の水量に対する生産密度はB試験池(6面) 2976 尾/ m^3 、 $6.6 \text{kg}/m^3$ 、A試験池(3面) 542 尾/ m^3 、 $1.3 \text{kg}/m^3$ であり、B試験池は前年とほど同程度の結果が得られたが、A試験池は前年の $1/7$ 以下であった。
- 本年度の飼育中の減耗の原因はGlugea感染症とA試験池で発生した異常大量死を初めとする生残率の著しい低下であった。
- 本年度の生残状況から済過槽の規模についてさらに検討が必要と考えられた。

文 献

- 1) 鈴木規夫 外 1972 アユの種苗生産試験—Ⅲ 本報 10号
- 2) 昭和49年全国湖沼河川養殖研究会第9回アユ部会資料 (1973)
- 3) 岐阜県水産試験場 1973 アユ仔魚期の大量死亡に関するアンケート取まとめ結果、第9回アユ部会資料
- 4) 神奈川県淡水魚増殖場 1973 各県のアユ種苗生産状況調査資料 第9回アユ部会資料

アユの人工種苗と天然種苗の池内での飼育比較について

鈴木規夫・小山定久

アユの人工採苗技術は急速に進歩し、各地で量産が試みられている。当場でも水量計70.6m³の飼育地を用いて昭和46年度223千尾、47年度139千尾の種苗生産に成功している。しかしこれら人工採苗アユは天然河川に放流された時の生残、成長が天然種苗に比べ一般に劣っているといわれ、放流用種苗としての用法、放流技術に種々の問題が提起されている。このため当場でも天然河川を用いて人工採苗アユ種苗の河川放流方法についての調査研究を行なっているが、その関連試験として飼育地内での両者の成長、生残の状態を比較検討するために本試験を行なった。

方 法

通常行なわれている飼育結果の比較は別個の地間の飼育成績で比較される例が多いが、本試験では人工採苗種苗と天然種苗の両者間の池内での競合関係が結果に現われるよう同一池内に両者を混合放養し、さらに密度効果を考慮して、飼育密度を変えて2面の試験地を用いて行なった。

供 試 魚

人工採苗種苗 昭和46年11月に県内相模川の産卵場で採捕した天然親魚から採卵し、ふ化後、汽水循環済過方式で飼育し、本試験の開始的60日前から淡水飼育池で市販配合飼料を用いて飼育した。

天然種苗(びわ湖産) 昭和47年6月21日にびわ湖から輸送し、約20日間上記人工種苗と同一の条件で飼育した。

試験開始時の両者の体型は人工種苗7.50cm、5.35g、天然種苗7.92cm、5.94gであり、天然種苗の方がやゝ大型

であったが、統計学的な差は認められない(表-1)。

表-1 供試魚の体型

項目	人工採苗	天然(湖産)
体長、±95%信頼区間(cm)	7.50±0.175	7.92±0.142
体重 " (g)	5.35±0.334	5.94±0.387
肥満度 "	1.10±0.040	1.18±0.018
測定尾数	55	46

試験池及び用水

用いた試験池及び用水は下記のとおりで、池は塩ビ製上屋内に設置されたコンクリート池である。

池の規模 6.0×2.0×0.75(水深)m

池水量 8.64m³

用 水 淡水、循環済過水

常時各池に0.25ℓ/secの湧水を添加注水した

換水率 0.54/時

飼育密度

アユの池中養殖時の放養密度は70~150尾/m³といわれているので、2面の内1面を100尾/m³とし、他の1池は